

# オニーダへの道

鈴木 真 一

## はじめに

19世紀後半、アメリカのニュー・ヨーク州に出現したオニーダというこの異色なコミュニオンを特徴づけるものは問題の多い「集団婚」の慣行であった。この奇習はキリスト教における完全主義神学者ジョン・ハンフリー・ノイエスの宗教理念に基くものであった。当時のジャーナリスト、C・ハートホフはオニーダを取材に訪れ、この集団をまさに先例のない「特殊の宗教・社会的拘束のもとに一夫多妻婚と一妻多夫婚を組み合わせたもの」と紹介している。1848年から1879年までの32年間近く、オニーダに存続したこの性的体系がコミュニオンが組織されるための社会的基盤となっていたが、集団婚自体が底の深い内的緊張をうみ、強力な外的圧力をうけて、コミュニオンが解体することになった。この性的体系では、特定のカップルの間に独占的愛情が生ずる単婚関係の成立をきびしく拒否することになっているが、それはこのような性愛がコミュニオンの秩序に背反する自己的行動と見做され、何よりも「愛のコミュニズム」を標ぼうするからである。そこでは特殊な方法による産児制限とか優生学的方策が伴っている。むろん、オニーダでは、集団婚の慣行以外にも、固有の集団機構、独自のメンバーシップ、日々行われる宗教・企業に関わる集会、経済組織の共同化などが、コミュニオン体制の社会基盤となっている。

しかし、オニーダでは、何よりも性の役割が、広い範囲にわたって豊富な記録が現存している当時の多くのアメリカ・コミュニオンにはみられないような急進的な働きをしている。オニーダ・コミュニオンはこれについて1867年、『Oneida Community Handbook』のなかで、誇らしげに、宣言している。

「自由恋愛はわれわれにとって今日、愛し、そして明日別れてしまうようなものを意味しない。…われわれのコミュニオンは乱交社会とは異質であり、普通の世帯のような生活単位としての家族である。われわれを緊密に結びつける紐帯は永遠の、そして神聖な、言うならば少なくとも結婚のそれであり、それはわれわれにとって宗教でもある。われわれは生活と永遠のための家族的関心に心を傾け、手を指しのべないようなメンバーを誤解と過失のばあいを除いて受け入れない。われわれは自由恋愛論者とよばれるが、実際に行ったことといえば、本質的には次のようなものである。われわれは単婚に訣別し、集団婚にまで進んだ。われわれは排他的な単婚を信じ、忠実にそれを順守するひとびとと議論しようとは思わないが、われわれにとって集団婚がヨリよい方策であることに決定した。理想の結婚を支える貞節と信頼とは、2人の夫婦の間にと同様に200人のメンバーの間にも存在する。婦人と子どもに保証するものはいかなる私的な家族よりもこのコミュニオンに多く存在する。」

小論では、アメリカ・コミュニオンの歴史において32年間存続するという数少ない、寿命の長く、そして独自のオニーダ・コミュニオンについて、その成立までの経過について検討する。とくに、集団婚の慣行その他の本質的特徴がすでに、オニーダの先駆的形態としてのプットニー・コミュニオンにどのように萌芽として明確に存在したかを指摘し、また、オニーダの宗教理念であり、ノイエスの

苦心の創案にかかわる独自の完全主義神学がどのように形成されたかを究明したい。

なお、オニーダの成立事情を検討するにあい、小論でも創始者であり、オニーダ・コミュニオンそのものを象徴するノイエスのパーソナリティとカリスマ性に触れない訳にはいけない。彼の生活と思想は当時から、そして今なお、ジャーナリスト・歴史学者・心理学者・リポーターの注目をひいているが、とくにここ 20 年間、脚光を浴びている。それは一つには彼がアメリカのコミュニオン史において、もっとも議論の多い人物のひとりになっているからである。R・トーマスはこの間の事情を次のように分析している。「ノイエスは 1960 年代、アメリカに発生した社会変革と共同体運動の巨大なうねりのなかで独特の地位をしめていることは疑問の余地がない。性の問題、家族生活、都市・農村ユートピアへの幻想と実験の増殖、世俗化した完全主義の出現は彼の思想との深い連がりがあるように思われる。研究者のなかには、彼の予知能力を高く称賛したり、あるいは彼をアメリカの聖者 (Yankee Saints) として偶像視するという寛大な扱いをし、ほかの研究者たちはバーモントのカサノバの汚名をつけるという冷酷な立場をとっている。……しかし、ノイエスの生涯と業績をこのようなカテゴリーをもってしては、この人物の神秘性・複雑さを解明することはできないし、彼への高い関心度、コミュニオン史における重要度からしても、彼の生涯と業績は今後さらに検討することが必要である。」

なお、小論ではオニーダ・コミュニオンに関する重要な諸文献を参照したが、とくに M・L・カーデンの『Oneida : Utopian Community to Modern Corporation』に負うところが多い。

## (一) 回 心

ノイエスがオニーダ・コミュニオンを創設する数か月前、母親が娘のひとりに次のような手紙を書いている。「たびたび、独り言をいっています。私は夢をみているのでしょうか。それとも、すべてが現実なのでしょうか。もし、ジョンがこの争いの世界に直面して自分の主張を貫徹し、その教理を実現しようとすれば、この見馴れた世界に最大の奇蹟が生ずるに違いありません。」それでも、彼女は息子の完全主義の信奉者であり、誠実な母親であったがノイエスの提唱した大それた社会的・宗教的変革への疑問をふっしょくすることはできなかったようである。

16 歳で神学校に入学する以前から、彼の知的成長は後に母親にいたましいショックを与えた宗教信念を確実につくりあげていった。当時の新しい宗教的・社会的信念は現在のヨリ自由な哲学への変化の始まりでもあった。しかし、ノイエスの見解はこの 1840 年の共通した精神的潮流のなかではるかに先んじていた。彼はバイブルの言葉ではなく、バイブルの靈感にみちた精神にだけ従うべきであることをひとびとに説いた。彼にとって道徳の絶対的規準は存在せず、或る時代には正しいと見做された事柄が、ほかの時代には誤まったものになる。また形骸化した規範体系よりは自己の内心に潜むものこそが至高善である。彼はこれといった特別の宗教用語を使用していないし、宗教上の晦渋な弁明がなくもないが、生活こそが幸福であるべきだと主張する。男も女も性関係をふくめたあらゆる生活体験の楽しみを望み、いっそう深めるべきである。宗教から性にわたる広い領域について、19 世紀のこの予言者は当時の硬直化した生活慣行に反対し、波乱に富む流動の時代の先端をきっていた。

ジョン・ハンフリー・ノイエスの少年時代については多くのことは知られていない。赤毛で、そばかすだらけの、気の弱そうな外貌をもったこの少年は娘たちの前では大変な恥しがり屋であった。ただ男友達の間では、はっきりしたリーダーシップを発揮した。とにかく、彼の平穩無事の少年時代からは後年のあの波乱に富むドラマの主人公の姿をほとんど予測できなかった。ノイエスは 8 人きょうだいのひとりとして、1811 年、ヴァーモントのブラトルボロに生まれたが、父はこの地の



大学を卒業し、交易場・マーケットなどを所有する成功した実業家であった。1815年、バーモント南部出身の下院議員に選出され、2年間をワシントンで過ごした。母親はアメリカ合衆国の第19代大統領のヘイズの親戚のひとりであり、その意味でノイエスは当時のユートピアン共同体の指導者としては珍らしく名門出身といつてよい。父は53歳で政界を離れ、幾つかの企業を売却し、隠退した。数年後、彼はブラットルボロの北10マイルの小さな町ブットニーで妻と8人の子ども連れて居を構えた。

F・ローレンスによると、若いノイエスが成長した家庭環境が後年のブットニーとかオニーダのコミュニティにおける組織生活の多くの特徴のなかに反映されているとして、次のような興味深い分析を行っている。この家族は情緒的、かつ知的雰囲気につつまれていた。ノイエスの父親は4人の弟をもっていたが、何れも内気であるために、従姉妹と結婚した。年長のジョン自身は長い間、独身が続け、ポリー・ヘイズと結婚したのが40歳であった。これは彼がポリーと結婚する心づもりをするまで長く、あいまいな態度をとり続けたからであった。息子の若いジョンも、父親の女性に対する極度の内気さと同時に異性との関係を知的なものにする傾向を受けついただようである。

1830年代の後期から1840年代の初期にかけて、ブットニーで共同生活を開始するに当って、ノイエスは家産を経済的基盤にして、家族メンバーたちを、彼が企図した拡大家族的コミュニティの中核部分にした。1841年、父の死亡以前からノイエスは母の抵抗を排して、家族の宗教面・家政面の運営に関する完全なリーダーシップを発揮しはじめた。彼はまた、妹2人ともっとも忠実な信徒2人との結婚をとりきめ、さらに妻のハリエット・ホルトンとその弟とをふくめた家族単位をブットニー・コミュニティの中心的メンバーとした。後年のオニーダでも、きわめて意図的にとりこまれた家族モデルは、彼の初期の生活で体験した家族的結合の拡大といつてよい。当時のメンバーのアベル・イーストンも多少は誇張しているが、オニーダを「有史以来、人類が遭遇したことのないような家族」と語っている。

ここでもとに戻る。ノイエスは当時の就学年齢として普通だが、15歳でダートマス大学に入学した。学生時代は成績優秀な学生が許可されるようなファイ・ベーター・カップに選出された。卒業後1830年、ニュー・ハンプシャーの法律事務所の見習いとなったが、弁護士に不向きであることを悟り、1年後、自宅に戻り、牧師になる決心をした。そして彼のキリスト教への真の帰依がブットニーの復活集会で突然行われたと告白し、彼は『Confession of Religious Experience』のなかで当時を次のように回想する。母親が教会に通うように懇願したため、しぶしぶ承知した。当時、宗教はすべてのひとびとが一度は免れることのできない一種の狂気と考え、わなにはめられるのではないかという恐怖心をもったという。だが、「ある時、一筋の光明が思わぬ方向から私の魂を投射した。はじめはその光りはほの暗く、ほとんど目に見えないほどであったが、日を追って輝やかしい光彩を放つに致った」という。とはいえ、このような衝撃的な回心に遭遇するためには早くから豊かな宗教的雰囲気が準備されていた事実も否認しない。母親は篤い信仰心をもち、子どもたちに新約聖書を日々読むようにすすめ、また当時の習いとして信仰体験を積むことを強調したが、とくにジョンには牧師になるように望んだ。

ノイエスは1年間、アンドバー神学校で真摯な信仰心をひめて、ひたすら読書と研究生活に明け暮れた。だが、そこでの雰囲気があまりに保守的であることが判明したので、ヨリ自由なエール大学の神学校に移った。そこでの研究のかたわら、ノイエスは長老教会派と会衆派の行事と教理を否認する信者により北東部全体にわたって設立されつつあった地域のニュー・ヘブレン教会に加入した。既成教派の大部分の牧師は自由教会の聖書のみを頼り、あらゆる伝統を徹底的に拒否する主観的解釈を受け入れるはずはなかった。しかし、同時に、彼らは信仰復興集会が自由教会に対して、高度



に整備された信仰手法の手本を与えたことと、既成の教理に疑問を抱くひとびとを触発した慣例にとらわれないのびやかな雰囲気がかもしだした事態を認めざるを得なかった。ノイエスが加入した12名ほどのメンバーは、復活集会と神学論争に時間を費したが、この肥沃な思想の土壌のなかから、ノイエスの急進的な理念の種子が生まれた。だが、いぜんとして彼はエールで研究生生活を静かに続け、ニュー・ヘブロンに到着1年後、説教師のライセンスを獲得した。彼の異端者としての声明はすでに学生と教授の間で批判の声があがっていたが、おそらく、エールの神学校当局は今後の研究への期待と、若さゆえの過激さから何れ脱して説教師になることを望んで、ライセンスの承認という寛大な処置をとったと考えられる。この神学校の正統派の内外の牧師関係者たちの間にも従来の教理に対する再検討の動きが生じた。たとえば、ニュー・ヘブロン文学部の一員、W・ティラーは人間の救い難い墮落、そして神の介在なしに善を行うことの不可能性に関するカルビン派の教理に疑問をいだき、善と悪とを区別し、選択することが可能な人間を神が創ったと主張する。修道院外部の一部の聖職者はさらに大胆であり、人と神との間に完全な愛が存在する状態に人間が到達することを告げたウェズレー派の聖化思想の教理をとりあげた。この新しい宗教理念は聖化よりも原罪についてあまりに多くの教えを聴き馴れた一般の市民に訴えることができた。その結果、新しい教義を説いたJ・ラツウーレットとJ・B・フートといった復活論者が一般によく知られることになり、彼らの神学は「完全主義」とよばれた。

## (二) ノイエスの完全主義

ここで「完全主義」について素描してみたい。ノイエスたちが南北戦争の時代にとりこんだ「完全」への大いなる関心はキリスト教のもっとも初期にさかのぼる先例をもっている。罪を克服することの、そして天国での「完全」をめざす理念はむろんのこと、キリスト教の歴史につねに出現するが、その起源から、まったく罪なき「完全」はこの地上においても実現されるし、実行されるべきことと信じたひとびとが存在した。完全主義の聖書のよりどころはマタイ福音書の「あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい」とか、「神の天国においてと同じように……地上にも訪れる」という言葉にあるが、それは或るひとびとにとって、地上での「完全」への願望、可能性、そして必然性を示すものと見做される。しかし、キリスト教が成長し、とくに5世紀以降、体系的宗教となるにつれて、千年至福論にみられるような関心は不確定な未来に委ねられてしまった。

それでも、正統には属さない分派のキリスト教会運動はその伝統を生かし続けたし、カトリック教会では、或る種の完全主義の傾向を受け入れる1つの組織、つまり修道院を共存させることを容認した。そこではキリスト教徒の人生行路を初心者、進歩者、完徳者の3段階にわけ、神の特別の恵みの力を受けることにより、魂は罪から完全に自由にされると教えた。この完徳は地上では修道院という存在において実現されることになる。

宗教改革後、アナバプチストのような分派運動の発生とともに、一時期ではあるが、完全主義への関心が16世紀に復活した。そして19世紀のアメリカでも、人間が墮落しきっており、神秘的、かつきわめて卓越した神の介入によってのみ救済されると主張するカルヴィニストに反対する立場によって表明された。この立場に多くの関心を抱く教徒は自己自身の救済を実現するのを助ける積極的な役割を果たすという人間の自由意志を説くアルミニウスの立場に移っていった。アルミニウス説はJ・ウィースレイとメソディスト教会の教理のおだやかな内容に反映されるような完全主義の傾向を助長した。メソディストは完全を前進過程と見做したが、完全は絶対ではありえないし、現世の生活におけるアダムのような、あるいは天使のような「完全」でもなく、むしろ「完全な愛」が



キリストによって要求されると論じた。このような「完全な愛」が地上においても実現可能であり、よこしまな気質、プライド、怒り、自我、罪からも「完全」にされたひとびとを自由にするが、「完全」を志向する実践的なひとびとも、曖昧な判断、不本意な怠慢、無智からはどうしても自由にならないことになっている。

しかし、完全主義の理念により影響されたひとびとのなかには、さらにこれを一步前進させ、地上生活における絶対的な完全を主張する神学者もいた。彼らはすでに罪から解放され、「完全」であり、そして「完全」である限り、神の意志と彼ら自身が同一になっていることから、彼らは自己が選択したままに行動すること自体が自由であると宣言した。ノイエス、シェーカー、および、類似の完全主義者は、この当時、ほぼ歩調を揃えてこのような信仰に接近していったが、同時にその信仰が絶対的個人主義と道徳律廃棄論に陥りやすい危険があることも認識していた。ノイエスは完全主義における無政府的傾向を克服することを試みて、彼の完全主義の理念を強化するために壮大な神学体系を構想した。この完全主義神学の出現以前に次のようなノイエスの第2の異常な宗教体験の事実があったことを指摘したい。アンドヴァーとエール時代の最初の年、「完全」の状況を実現させようとした彼の努力はしばしば数日間、成功に近づいたように思われたが、つねに失敗に帰した。彼は「完全」を得るために或る特殊な努力を試みたという。その努力がどんなものかは言明されていない。或る日、彼は終日祈り続け、また聖書を憑かれたように読みふけり、靈感を得て「完全」の実現を待った。「私は後戻りができない感情を抱いて家に戻ったが、夜、ベッドのなかで私が望み、かつ期待した霊的洗礼を受けた。3度の素早い継起のなかで永遠の愛の流れが私の心をほとぼしり、その源に戻っていった。そして語ることのできないほどの光栄に戻っていった。そして、語ることのできないほどの光栄にみちた喜びが私の心を満たした。あらゆる恐怖、疑惑、非難が消滅した。私の心が清らかになり、神とイエスが到来されたと信じた。」と当時を回想する。彼の神学について詳細にふれることは小論にとって必要ではない。ただ、主要な点はノイエスが究局的に地上での「完全」の理念を確信できる宗教体系の構築を試みると同時に、この神学に潜在する過剰なものの表出を抑制したことも事実である。

ふたたび、ノイエスの行動と生活に戻る。完全主義の教理について研さんを続け、説教師のライセンスを受けた直後、異常な状態が発生した。1834年、2月20日、ニュー・ヘブン自由教会での説教で、「罪をおかす人物は悪魔の仕業である」と語った。この驚くべき声明がこの時代、どのような激しい動揺のなかで受けとめられたかは想像に難くない。ノイエスの孫娘のパートソンは『Oneida Community Profiles』のなかで当時の事態に関するノイエスの回想を紹介している。「数時間で、大学と町中にこの言葉がかけずり廻った。このあとを追いかけるように、ノイエスが自分が完全であると主張しているとされ、そのあげく、ノイエスは狂人になったという噂も生じた。……この数日間、私は教理と進歩への期待を除いて、私自身を完全とはまったく思っていなかった。……私は外界における完全も主張しなかった。私は心の純潔につとめ、神への良心をつくすだけであった。」このようなノイエスの告白にもかかわらず、人間は「完全になりうるし、彼自身が完全になったと宣言したと強要され、これが契機となって、彼と神学校仲間との間で激しい論争が行われ、彼に対してほとんどのメンバーが反撥し、ここでも彼が狂人視された。さらに彼に対する自由教会の全面的拒否といった事態も生じ、結局、エールの教授団の圧力によって、ノイエスは説教師の資格を剥奪された。この間の事情をノイエスは次のように語っている。エールの特別の集会で「ノイエス氏のキリスト者としての資格はないと判断し、この協会は福音を伝道するためのライセンスを没収することをすすめる」との提案がだされた。この申しあわせは、単に彼に対する強迫にとどまらず、事実となった。「私は彼らの免罪符をとりあげたし、彼らは罪のなかに沈みこんでいる。……私は今後



も説教し続けるであろう。」

### (三) ニューヨークの体験

説教師を解任され、23 歳になったノイエスはこれといった同志もなく、孤立し、彼の未来は暗たんたるもののように思われた。だが、新しい未知の教理の構想に従事すると同時に、彼は完全主義が「神秘主義とか野蛮」という悪評を拭いさろうとし、彼固有の完全主義の宣伝につとめた。この年、彼はニュー・ヨークでの牧師と神学者の年次大会に参加したが、積極的に自分の教理を発表することを控えた。アメリカ全土から来席した代表者のなかに完全主義に関する独自の説教を開始していた偉大なリバイリストである C・G・フィナーと会見することを望んだ。フィナーは「完全」とは神の法に対する完全な服従であるとし、ひとびとに求めるものは神の与えた心、魂、精神、力の限りを尽くして、主なる神を愛することに尽きると主張した。そして、天にいます父なる神が「完全」であるようにという教理に忠実に従う限りにおいて、ひとと神と同じように完全になれると宣言して絶対論者に衝撃を与えた。しかし、彼の尊敬する、この温厚なリバイリストとのインタビューの実現にも失敗した。また、完全主義の影響を強め、彼自身の信念を確実にするために、ほかのリバイリストとか牧師たちとの熱心な神学上の討論を望んだが、これも失敗に帰した。結局、誰もがこの狂おしく燃えるような異端の徒と関わりあうとはしなかった。この期待外れと、宗教問答のつまづきに直面して苦悩し、絶望の底に沈んだ。それから3週間、ほとんど眠らず、飲まず食わずで、とうがらしのような刺戟物を偏好し、ニュー・ヨーク市内をうろつき廻わり、教会の定めた禁欲の戒律への故意の反抗に酔いしれた。彼は貧困者と浮浪者を相手に難解で晦渋な彼の神学を教えようとした。彼の行動は明らかに異常であり、錯乱状態であった。おそらく、若きノイエスの最大の危機は「ニュー・ヨークの体験」であったに違いない。彼の異常な体験の一部は次のように語られている。「私は精神的はりつけとでも表現のしようのない不本意な思考と感情の長々としたプロセスを経験した。キリストの死後のあらゆる出来事が私の心のなかで生々と画かれ、私の感情のなかに体现した。私は傍観者としてではなく、犠牲者としてこれを体験した。しばらくの間、キリストは復活し、私は受難から解放された。」そして、これは彼の宗教的信仰と矛盾するのだが、キリストが「この世に復しうするために炎にのなかに燃えて」降臨する姿をまざまざと見えてきて、彼自身が悪魔になるのではないかという不安にかられた。だが、この恐怖にみちた経験を通して定期的に神の恩恵の証しを受けたという。また、これは後年のことだが、「ニュー・ヨークの体験」にふれて、当時の状況をつまづきでもなく、まして不道徳でもないと言断した。とにかく、最終的に知人が彼の悲惨な姿を発見し、弟のホラティオに連絡して、ニュー・ヘブロンに早く帰れるように取り計った。帰宅後、短期間で彼は回復したが、この事件を契機にして、ニュー・ヘブロン完全主義者たちのなかには気持のさめる思いをするメンバーも一部にはいたが、残りのひとびとは冷静にこの事態を受けとめ、やがて大部分のひとびとはこの事件を忘れてしまった。

「ニュー・ヨークの体験」で彼が後年になってより支配的になったほかのメンバーに自分の地位を譲ることのできないという彼のパーソナリティの特徴を示した。ニュー・ヨークで誰も彼を重要な宗教的指導者として認めなかったとき、このような無視は堪え難いものであった。彼は自分の神聖な使命を再確認し、彼が教示し、かくあれと望んだ事柄を正当化するために注目の中心であることを必要とした。この時期以降、印刷物とか説教によって、聖書の解釈にしる、個人的攻撃にしる、彼は完全主義運動の中心的地位を占め、それを誇示しようとした。

#### (四) 集団婚の理念

ニュー・ヨークの大会で神学者たちに対し、これといった印象も残さなかったという失敗にもかかわらず、ノイエスは自己の独自の完全主義の信者の獲得をめざした。彼はニュー・ヨーク州とニュー・イングランド地方を次の2年間、伝道旅行を精力的に行い、ほかの完全主義の指導者たちと異なる新しい教理について大胆かつ卒直に主張した。すべての完全主義者の正統のキリスト教からの異端にもかかわらず、そのどれもがノイエスのもつ異教的様相とは相異していた。たとえば、キリストの再臨はすでに行われたとか、人間は完全になりうるし、救済を得た以後は恩寵をうけることはできない、あるいは人間は自己の内なる信仰を教会の權威によってくつがえすことを許すべきではないといった見解などである。

このような宗教信念はノイエスがJ・ボイルとC・デュトンと共同して出版した定期雑誌『Perfectionist』に記されている。600人ほどの購読者がこれを読み、彼の見解を知るようになった。この雑誌は2年間刊行されたが6か月でノイエスはほかの2人が彼の見解に賛成しなかったことから投稿することを中止した。そして、ニュー・ヨークとニュー・イングランドの伝道後、ノイエスは1836年の冬、ブットニーの両親の家に戻った。

この時期は概して完全主義の運動に関する限り、平穏無事にすぎた。しかし、家庭ではノイエスは彼の今後の構想の核となるべきものに専念していた。以前から家族のひとびとは彼のひたむきな宗教的使命に反対していた。彼らはエールの同僚と同じようにノイエスが発狂したのではないかといふかかったほど、彼の宗教観がひどく奇妙なもののように思われた。彼らはノイエスが家を離れて彷徨することを中止するように、そして商売をするか、会計事務所の書記をするか、それとも教師になるように懇願した。それが、ここに到って、きょうだいのなかには彼の教理にしだいに関心をしめすものも現われ、ブットニーに移ってから、彼らを改宗さすべく全精力を傾け、従来の説教体験を活かして結局は成功するひとになった。家庭に残っている4人のきょうだいのうち3人がこの時期に改宗し、生涯、忠実な完全主義者になった。母もまた、ときには彼の教理に疑問をもち、何度かこの宗派から離れたこともあったが、完全主義者と見做したといいてよい。父は息子の不安定な生き方を認めず、その宗旨にも反対した。そしてブットニーの信者が彼について言うことのできた大部分は実践者ではなく、彼が神学者として、いわゆるブットニー聖書学校で教えた完全主義への知的関心をかきたてたことであった。

春を迎えて、ノイエスは教理をさらに前進させるためにふたたび出発した。この伝道旅行は前年、ニュー・ヨークで遭遇した苦難の体験に比べてはるかに成功した。北東部の到るところを伝道したが、とくに、C・フィナー、W・グリーン、および改革者のG・スミスとかW・L・ガリソンとの宗教問答が行われたことによってノイエスは独自の完全主義の教理が世間に影響力を与える重要人物によってそれなりの評価を得たという確信をもつに到った。そこで、新たに宗教上の改撃と定期刊行物が引き続いて出現したが、とくにニュー・ヨークで完全主義神学の総合化を試みた論文を掲載する『Witness』を公刊したが、これは26歳の若者としては注目すべき業績といわれる。

ノイエスなどの完全主義運動の指導者たちの「完全」であることを可能とした主張を支持する一部のひとびとは、ノイエス自身の教理とは反対に、その内的「完全」を確信することによって、その外的行動も自動的に「完全」になりうるという錯覚におちいった。このような錯覚は彼らの開く宗教集会で情緒の高揚により、手を握りあったり、キスをするといった行為の弁明ともなった。これが外部からは、彼らが性的誘惑を行い、性的乱交におちいつているという誤解も受けた。

ノイエスは自分の評判が悪くなることを恐れて、メンバーたちの生活行動のための道徳基準、そ



れも因習的基準に馴染むような倫理を設けることに心を砕いた。だが、それでも彼自身の倫理が伝統的規準よりもはるかに進んでいたことを認めざるを得なかった。彼の見解はA・マーウィンに対する情熱的な愛情によって影響されている。完全主義運動の初期の信奉者のひとりであった彼女がノイエスの求愛を拒絶したとき、完全主義の福音をも拒否した。彼女がほかの男性と1837年に結婚したときには、彼を永久的に見捨てたとして彼女を許さなかった。彼は一夫一婦婚が天国に存在しないし、終局的には、この地上では廃止さるべき圧政制度と見做した。このような見解は信徒のD・ハリソンへの手紙に示されている。この手紙は数か月間、公表されなかったが、結局、ハリソンは完全主義者のT・R・ゲートに説得されて、彼の主宰する『Battle-Axe and Weapons of War』に掲載することを承認した。その一部は次のようなものである。「私は1つのデリケートな主題を心のなかにもっていることを書いてみたいし、この手紙を他人に見せることが適切であるかどうかはあなたの判断にまかせようと思う。神の意志が天国において働いているように地上において働くばあいに結婚は存在しない。独占、嫉妬、口論はキリストのよみする結婚には存在しない。神はその思召しとして、背教の時代にあって男と女との区分の壁を設けた。この区分は神の思召しと、復活の時代において廃止されるであろう。しかし、神が復活の聖潔化のなかに立たれる以前、背教の法を廃止する者に災いあれ！ 私が或る婦人を妻に迎えるとする。彼女はあなたたちのものだし、そして神にとって彼女はあらゆる聖者の花嫁でもある。」

この手紙の公開は完全主義者の間にセンセーションをわきおこした。この運動に参加する誰もが、ノイエスの結婚相手の交換に関わる宗教理念について公式に発表したものはいなかった。もともと、聖化に関わる彼の過激な声明をうけ入れるノイエス派のメンバーの数は少かった。それがノイエスの手紙の公開により、信徒の多くが脱落し、小さなグループのみが残った。彼の悪評はさらに高まり、彼の使命も終わりを告げるように思われ、ふたたび孤立してしまった。

ノイエスの奇異な靈感の力を感じとったひとびとのなかに、ハリエット・ホルトンがいた。彼女はノイエスの論文『The Second Coming of Christ』を読み、1834年、罪からの解放を信じた。彼女の家族も、またその依属をうけた牧師もホルトンの信仰を変えることは不可能であった。彼女はノイエスの著作の研究を続け、ノイエス派にかなりの経済的奉仕をするまでになった。ノイエスは彼女とそれほど親密ではなかったが、彼の結婚に関わる宗教理念を積極的に受け入れることを条件に求婚し、彼女もこれを受諾した。ノイエスは彼女の「多くの望ましい素質」を愛し、彼女との結婚がひとびとをより幸福にすると信じた。2人は彼らの結婚に祖父が反対することを恐れたが、説得につとめ、1838年6月に結婚した。

この結婚により6年間で5人の子どもの父親となった。不幸にも、ひとりを除いて4人の子どもは死産であった。ノイエスは失った子どものためだけでなく、妻のためにも深い悲歎にくれた。「それにしろ、毎年のように引き続いて、望むにしろ、望まないにしろ、子どもを育てるという婦人の宿命とは何であろうか。それはすべて自然の至上命令であろうか。人間に何ができるか」と思案する。シェーカーは生涯独身状態を続けることによって、この問題を解決した。ノイエスはこれを認めるのにやぶさかではなかったがこの解決方法には反対した。この解答は何れにしろ一種の産児制限であり、最終的に「coitus reservatus」という方法を思いついた。それが、オニード・コミュニケーションの存続中、メンバーの間で成功裡に行われた。

この時期、ノイエスはまだ地上に天国を実現する願望よりも、天国への1つの条件として、なおも地上での一夫一婦婚の廃止を構想していた。さし当って、彼は完全主義の教理をひろめ、この運動の指導者としての地位を確実なことに専念した。そして、彼は完全主義神学の普及をひとびとに対する説教という手段よりも、出版物の発行に求めた。そこで古い印刷所を買取り、結婚後



1 か月で、ノイエス、妻、2 人の姉妹、末弟がノイエスの初期の諸論文をまとめて『The Way of Holiness』を発行し、さらにその後、彼らは1 年以上以前には資金難のため実現できなかった『Witness』を発行することができた。そこで、ノイエスの信徒は彼の完全主義神学の教理を把握するための3 つの主要な文献、つまり『The Way of Holiness』、『Witness』、そして『Boyle's Perfectionist』をもつようになった。

ノイエスの神学はそれ自体、総合的であったが、はじめは「完全」なコミュニケーションの観念をふくんでいなかった。彼は既成の教会を通して完全主義の布教を、そして結局は正統な教理の思いきった修正を促すことを期待した。しかし、彼はしだいに既成の教会が「完全」な結婚に関する彼の見解と決して一致しないし、彼が主張した結婚形態が孤立したコミュニケーションを除いては実現しないことに気づいた。

新約聖書のなかに「復活のとき、人はめとることも、とつぐこともなく、天の使いと同じようである」の言葉があるように、そこでは人間は結婚という形態が与えられていないから、救済された人間が性なき創造物であることを意味するように解釈されていた。ノイエスは反対の立場をとり性関係は地上と同じように天国にも存在する。という。彼は結婚に関わる従来の解釈が真実ではなく、一夫一婦婚が死後の生活には存在しないことを意味するという。キリストはすべての信者たちが1 つのもの、1 つの家族として存在することを願っている。

男あるいは女は神への愛と隣人への愛というキリスト教の2 つの中心原理を実践するにあたって一夫一婦婚はありえない。配偶者に対する「独占者愛情」は神および同胞からの配慮を受けない。人間にとってすべてのひとびとを平等に愛し、また神への最大の愛を捧げることが望ましい。天国において性関係が存在するとすれば、理想状態ではすべての男性がすべての女性と結婚するものと見做されるべきである。もし、この天国が地上において実現されるとすれば、そこでは「集団婚」の体制のようなものがあるに違いないとノイエスはいう。

パウロの結婚への反対はノイエスを思いとどまらせなかったし、あるいはその使徒への礼讃を減ずることもなかった。パウロの「結婚への反対は性関係への反対ではなく、俗世の、そしてうつろい易い関係のなかで生ずる情欲の混乱に対するものである」とノイエスは云う。

パウロは死後の生活まで理想的な結婚体制に参加することを待たなければならなかったのに対し、ノイエスは人類がこの地上に理想的な結婚を導入できるほど進歩したと感得した。しかし、しばらくの間、地上の理想天国は俗世界から孤立した分離社会にだけに実現できるという。ノイエスはまたコミュニケーションの必要はほかの観点からも正当化されると信じ「人類の集合体の形態的特徴は彼らが現実生活する社会をモデルとして形成されるし、形成されなければならない」と理解した。ただ、不完全な社会の有害な影響下にあっては、人間は神の御心から十分な恩寵を受けることはできない。したがって、「永遠の生活と公正な心をもとうとするひとびとが、俗世界から分離し、よき社会を樹立するという企図のために、コミュニケーションを形成すること。これこそが真の教会であり、これこそが善良なひとびとを形成するための組織体として機能する」ことになる。そこには、地上での「完全」が最高度の形態に達し、完全主義の諸理念が実践される、いわゆるユートピアが存在することになる。

#### (五) プットニー・コミュニケーション

ノイエスは結婚後、プットニーに居を構えたとき、彼をとり囲んでいる信徒たちの小集団をまだコミュニケーションとは見做さなかったようである。それでもこの集団は引き続いて9 年間にわたって、しだいに共同体社会の形態をとりはじめた。この時期、ノイエスは著作物の出版と攻勢的な説教に専

念した。彼はほかの完全主義のいくつかの集会に出席したり、完全主義運動のリーダーシップをとろうとし、教理の伝道のために組織された地域グループの小さな会合にも赴いた。彼の宗教理念は多数の信徒を獲得するにはあまりに極端であったが、堅実に伝道活動を拡げていった。しだいにニュージャージー、北ヴァーモント、マサチューセット中部の完全主義者の小さいが、いくつかの教派がノイエスを彼らの指導者と見做しめた。

彼ら信徒たちにはブットニーから各種の出版物が送付された。『The Witness』は『Perfectionist』に受けつがれ、さらにこれが『Spiritual Magazine』に引きつがれた。これらの定期刊行物はノイエスの神学の数多くの、そして長い論文が掲載されていた。彼らはまた北東部の到るところで完全主義者が会合をもつことを奨励したり、集会の活動内容を報告するなど、完全主義者集団の進歩を記録している。しばしば、社会改革、奴隷制度の廃止、政治問題のようなテーマがコラムのトップをきっていた。また、ノイエスはフリーエのファランクスなどの当時のさまざまな共同体についての批判もたびたび行っている。

1841年になって、しだいにひとびとはノイエスの教理を支持するようになったが、彼らはしばしばノイエスの教えと矛盾するような解釈をとった。そこで教理と実践するためには、或る種の組織形態をつくるが必要とされた。ブットニー聖書学校(The Putney Bible School)は名称だけの組織であったが、1841年に研究協会(Society for Inquiry)に正式に合併された。しかし、それは非常に小さな集団だった。おそらく12人以上に満たなかったが、彼らは共有する完全主義の信仰を発展させ、助長する役割を荷うという業績を残し、ノイエスの教理に基く正統の信奉者の中核を形成することになった。

この協会は経済基盤をもつことによって、コミュンへの重要なステップを踏みだすことになった。1841年のはじめに、ノイエスの父が死亡する8か月前、遺産を8人の子どもたちに分与した。ブットニー・グループに所属する4人の子どもにはほぼ20,000ドルが渡ることになり、はじめてノイエスがかなりの資金を引きだすことができた。それに加えて、家族からの財政援助を期待することができたし、これが呼び水になって、広く完全主義者たちの寄進を仰ぐことも可能になった。彼の妻は基金を提供し続け、結局、その合計額は16,000ドル分に相当することになった。これにより資金のない信者たちは最終的にこの協会に加入するようにすすめられた、このグループの共同体としての形態はより正規なものになった。ノイエスと弟、および2人の義理のきょうだい共同して財政面を担当した。1年後、彼らは信徒たちを正式のメンバーとして再組織することになり、それと同時にコミュンへの基盤が形成され、28人の成人と9人の子どもたち、その半数はブットニーから、残りの半数が遠方から参加し、この組織に所属することになった。

この組織はノイエスの遺産分の2つの農場と店舗の運営によって不安定ながら維持することをもくろんだ。この企業にメンバーたちが従事しながら、完全主義のコミュンによって生ずる年700ドルから800ドル分の欠損が気掛りな支出となった。

そして、はじめにまだ少数の参加メンバーがノイエスのきょうだいの所有する家屋に分散し居住した。彼らは男が農場と店舗の仕事に、女は家事に従事するという分業体制をとり、子どもたちのために小学校がつけられた。ノイエスは男女のメンバーとともに聖書を読み、神学を研究し、宗教論を討議するために日に3時間をあてるべきと主張した。これは労働時間を縮小させ、企業の経済生活を圧迫したが、ノイエスはかたくなに宗教活動を生活上の最優先にした。

このコミュンが民主制形態を採用しなかったことは明らかであり、メンバーがノイエスの専政制を全員一致して承認し、彼は自己の教理、あるいは3つの世帯の組織化に反対することを許さなかった。そして彼の姉妹たちも、それぞれの配偶者選択についても彼の意志に従わねばならなかつ



た。メンバーのなかの一組のカップルは従順ではなく、恋愛感情を抱いたこの男女はひそかに結婚関係にまで行きついたが、ノイエスにより、このコミュニオンから追放された。それは彼らが相手を勝手に選択したのではなく、ノイエスの承認なしに行動したからであった。彼はコミュニオンのすべてのメンバーの行動と性格を自由に批判し、たとえば、彼らのプライドとか俗物性を批判したし、彼の母さえも例外ではなかった。ノイエスは母親が彼の意向にそうこと、そして家事に従事することを中止するよう要求した。

こういったことから、若干のメンバーがノイエスの高圧的態度に反撥したのも当然である。成人の9人のメンバーが5人の子ども連れて、1843年と1844年にコミュニオンから出ていった。彼らはノイエスの大胆きわまる談話が受け入れ難いとして、自発的に、時には要求されて、もとの俗世界の生活に戻ってしまった。しかし、こうした事態によって、ノイエスはグループの編成替えを試み、彼らは素直にこれに信心深い信徒として従い、1848年、19人の成人メンバーがこの組織にとどまった。このうち、16人がブットニーに残り、さらに死ぬまでオニードにいるか、あるいは1880年の終り、オニード・コミュニオンの崩壊まで残っていた。

アメリカの共同体運動への熱狂ぶりは、1820年代の半ばに1つのピークを迎え、1842年と1845年の間に第2のピークに到達したが、この種の共同体はフリーエ、オーエン、カペーといったユートピアン社会主義の影響をうけていた。この第2の時期にブットニー・グループが出現したわけである。また、この時代にノイエスの関心はしだいに真のコミュニオンの創設に変わっていった。彼はこのコミュニオンの形成という俗世界からの完全な分離だけが、多くの矛盾したほかの諸宗派の教理から彼の信徒を守り、完全主義の原理の導入を許すものだと見做した。それに加えて、このコミュニオンにおいて、完全主義者が彼のもくろんだ結婚関係のこれまでにない新しい形態を実現できると考えた。

概して、当時のひとびとはノイエスの宗教原理については容易に知ることができるが、彼の社会理念については、あまり知られていない。1837年の『Battle-Axe』の手紙の出版に伴ういまわしい反響は消滅してしまい、彼の結婚に関わる公けの声明は次の言葉にとどまっている。「あの出版物の時期から……愛のコミュニズムの教理を実行する」ことが要求されたという。

1847年のブットニー・コミュニオンの解消まで、ノイエスの身近かなものだけが、彼の完全社会の観念が集団婚の慣行をふくんでいたことを知っていた。しかし、1840年代の半ばごろ、少数のメンバーはノイエスに対して、結婚の枠を越え、夫と妻とがほかの異性のメンバーと性関係をもつべきことを宣言することを期待した。数人の男性と女性のメンバーは、彼らの配偶者に対し不倫な行為をする誘惑に駆られた。少くとも、ひとりの男と女のメンバーとがそのような行為があったことが知られている。しかし、この関係がノイエスの耳に入ると、彼はきびしく婚外のどんな性的親密さを禁止したが、その根拠として、そのような行為は彼らの信仰段階では神の意志によるものとはまだ確信できないと指摘した。

しかし、ノイエス自身はこの新しい結婚体制に向けて出発した。1864年5月、彼はコミュニオンのメンバーM・E・クレイジンにひきつけられていることに気づいたし、彼女もその愛に報いようとした。同時に、クレイジンの夫のジョージとノイエスの妻も相互の愛情の成長を認めた。この4人の注意深い議論の後、彼らの性的パートナーを交換することが神の意志であるという確信を共有した。そして引き続いて、2つのカップルがこの集団婚の実践にすぐ参加した。1846年の終りに、ノイエスと妻、G・クレイジンと妻、ノイエスの妹シャロットとハリエットとそのそれぞれの夫のJ・R・ミラーとJ・L・スキナーも彼らの「社会共同体」(Social Union)の原理を主張し、彼らは物的所有と人的所有をふくむあらゆるものの共有を意味する絶対コミュニオンの実現に同意した。さらに

彼らはあらゆる事柄に関する神の究局的な権威を承認し、聖霊がよみし給うたこのようにしてつくられた家族の父であり、監督者としてのジョン・ハンフリー・ノイエスの意志に服従した。

このようにして、ノイエスとその姉妹たちはこの集団に参加したが、彼らがインセストを回避したことはむろんである。

しぜんと、この完全主義者たちは頻繁にほかのブットニーの信者たちと会合することにつた。彼らは毎晩、ノイエスの家に集まり、日曜日にはメンバーたちが建築した小さな教会でノイエスの説教をきき、彼を交えた会員で夜食をともにし、職場でもしばしば会合をもった。そのうちに、すべてのブットニーの完全主義者は、中心メンバーたちが集団婚を実践していることを知るようになった。ノイエスの伝道旅行は広く全国に及んだが、彼はもっとも忠実な信徒たちのごく少数のメンバーに対して、完全主義の教理における新しい性の在り方を明らかにした。だが、集団婚の慣行が彼の承認なしに始められるべきでないことを慎重に注意した。

ブットニーの完全主義者のひとり、ないし2人のものが、中心メンバーの性的慣行を町民たちに洩らしてしまった。この噂は急速に拡がり、ノイエスが実際のところ、何が行われているのかという詰問をうけたが、その状況を説明し、また勇敢に弁明につとめた。この時期、次のような奇妙なエピソードがホワイトワーズによって引用されている。「1847年6月、ノイエスはH・ホルの厄介な病気を奇蹟的に治した。彼女はメンバーのひとりであり、むくみと肺結核の合併症で医師により治療不能とされ、数年間、病床にあった。そこで、この宗派はこの奇蹟をノイエスの恐るべき霊力の明らかな証しとして喧伝した。だが、夫のホルはもともとこの宗派に対しどっちつかずな態度であったし、性的交渉が治療の一部であるというノイエスの告白により、ノイエスへの感謝の念が薄れ、ブラトルボールの州の弁護士に告訴の意志を表明した。」1847年10月、この事件により噂が噂を呼んで、暴徒化した市民たちの過激な抗議のなかで、ノイエスは姦通罪の疑いで裁判所に引き出された。彼は2,000ドルの保釈金を支払って一時的に自由の身になった。

裁判は進行中であったが、完全主義のこの指導者は有罪になる覚悟をもっていた。しかし、今後の事態に対しどう対応するかを検討と義論を重ね、さらに弁護士の助言もあって、ニュー・ヨークに難を避けた。後年、ノイエスはヴァーモントからの退去の理由について、暴徒の迫害の脅威が明らかになった状況で、信徒を守るためと説明している。

数か月間は後に残されたメンバーは共同の企業の経営を続けたし、ノイエスの義弟の弁護士L・G・ミードは今後もコミュニケーションを継続できるような方策を進言した。彼は完全主義者ではなかったが、ノイエスの家族の援助を考慮し、妻はその教理に同情的であった。完全主義者は友好関係を回復するために町民たちと数回にわたって会合をもったが、ノイエスの計画したコミュニケーションにとって、ブットニーは決して好ましい環境でないことが判明した。

## （六）オニード・コミュニケーションの成立

ブットニー・コミュニケーションが周囲からの敵意と攻撃を受けている時期に、ノイエスの忠実な、ほかの完全主義者の小さなグループがニュー・ヨーク州のマジソン郡で共同体の設立を開始していた。彼らはニュー・ヨーク州の完全主義者の会合に出席した9月、その実現の具体的な方策を構想していた。2か月後、12人の成人メンバーと子どもたちはオニード・クリークの旧い製材者の敷地に集まった。この土地の所有者J・パートをふくむメンバーはノイエスに彼らの計画を報告し、ブットニーの完全主義者たちをオニードに移すことを提案し、同時に彼を招待した。ノイエスはこの創設期のコミュニケーションを訪れ、そくごとにこの提案を受け入れた。善意のひとパートは旅費として500ドルをブットニー・グループの数人に送金した。次の18か月間、宿泊設備が用意されて、ブットニー在住の51



名の成人メンバーと14名の子どもたちがオニードに移住してきた。また、ヴァーモントから数名のメンバーも合流し、このひとびとによってオニード・コミュニオンが創設されることになった。

19世紀の間、多くの「コミュニオンの熱狂が燃え広がった地域」と呼ばれたニュー・ヨーク州の北部を横断して遼原の火のように拡大していった。アメリカのコミュニオンの長い歴史のもっとも後期の輝やかなしい幾つかの典型例が、この地域のおだやかに起伏する田園と緑の谷間のなかにつくられた。グローブランドの近くにシェーカーの小さなグループが規則正しい日常生活と農業・手工業労働に従事していた。この地方の到るところで、ユートピアン社会主義への情熱をもったアメリカ人たちは1820年代と1840年代に苦しい試練のなかで集団実験を体験していた。この最初は3つのオーウェナイトのコミュニオンであり、遅れてフリーレストの共同体が短命であったが設立された。パルミラでJ・スミスはエンジェル・モロニーからモルモンの啓示をうけたと宣言した。数年後、W・ミラーの信者たちが、1844年の至福1000年を不安げに待っていた。これ以外の大部分の運動は数年以内に死滅したが、オニード・クリークの完全主義者により建設されたコミュニオンは30年以上にわたって存続した。

オニードでノイエスは完全主義神学が社会生活にいかに関適用されるかを美事に示した。彼は建物の配置の青写真とか、労働力の配分のルールを作成して出発したわけではなかった。むしろ、彼は一般原理に従って諸規則をつくった。完全主義の教理はこの地上に天国を創設する合理的根拠となり、コミュニオン生活を支配する2つの原理—個人の完成と共同体の善—を与えた。

ノイエスに従うと内的完成を標榜するひとびとは誰もが、彼の道徳的・霊的性格の改良、彼の知的素質の発達、すべての潜在的特質を実現させる作業によって、内的状態と調和する外部的行動を表出させるよう努めなければならない。ノイエスの完全主義運動が性格を完全にするための養成所であることを主張する。完全主義者は「消極的精神」を追放しなければならないし、それに代わって「愛の精神」、「子どものような自由の精神」、そして「神の意志を知り、神の意志にそって行動する精神」を追求しなければならない。霊的関心のように、知的努力を物質的要求に優先しなければならない。プットニーでも、労働は研究に費される時間を減少してまで行われることを容認しなかった。オニードでも、労働は研究に費される時間を減少してまで行われることを容認しなかった。ノイエスはひとびとが最初の苦節の数年間、経済基盤が絶望的状况であったときでさえ、コミュニオン内部の学習クラスに参加することを要請した。『1850年の第2次報告』(The Second Annual Report)は彼らの目標を次のように宣言している。

「この学習クラスの若者、コミュニオンの全成人メンバーは知的改良のためにグループとサークルを構成することが奨励された。このようにして、科学・文学・音楽・芸術がかなり修得された。われわれはいままで中心的事項、つまり霊的発達に集中してきたが、できるだけ早く、調和のとれた発達を志向すれば、われわれの共同体は普通教育にとってももっとも完全な長所を発揮することは疑いない。」

このレポートはコミュニオンへの教育理念が広範囲に及んでいることを指摘するに到っている。「このように企図された教育(永遠の生活がそうであるように)は、この世界に通用する単なる書物の知識以上の遠大で、広範囲の、そして実用的な何ものかであるべきではない。」終りに、ここでも自己実現の理念を繰り返している。「われわれは教育をあらゆる行為の技術と才能と規定すべきであり、肉体と精神両面にわたるわれわれのあらゆる力と能力の十分な発達と妨げられない行為であり、このように規定された教育は人間の素質の範囲内のあらゆる事柄をなしうる能力を意味する。」

第2の共同体の原理、あるいは理念は第1のものと不可分のものであり、個人の完成はコミュニオンの次元においてのみ十分に実現されうるものであり、各メンバーは私的関心のすべてをコミュニ



ンに従属させ、財貨、時間、人間の所有は禁止された。メンバーは絶えず、自己完成につとめ、「公けの精神」、あるいは「コミュニンの精神」を求め、「完全に従順な精神」を求め、「安全に従順な精神」をもって「私的関心と自我」と闘い、それによって、彼はキリストと教会に対し、全面的に自己を委ねることができる。コミュニンにおいて果す「われわれ」(We)精神をもってすれば、「私的関心を払底した芳香」はこの共有の家庭の隅々まで漂うであろうという。

オニーダの家族の登録簿には、オニーダ共同体に加入した最初のメンバー111名のそれぞれについて、名前と個人的資料が書きこまれている。彼らの大部分は数年間にわたって、何らかの意味で完全主義運動に参加している。なお、このリストには14名の資料がふくまれていない。そして59名は5年、あるいはそれ以上にわたり、18名は2年から5年にかけて、20名は2年以内、オニーダ・コミュニンのメンバーであった。5年以内のうち、9名は長い間、完全主義に関心を抱くメンバーの被扶養者か、あるいは20歳前半の若い男女であった。

初期のメンバーの社会的・宗教的背景に関わる比較的乏しい資料にはこれといった特徴的な事例が認められない。大部分はニュー・イングランドとニュー・ヨーク州の農村地域とか小さな町から移ってきたが多くの農民であった。それ以外の職業としては活字工、トラップ製造業者、手工業者、簿記係り、靴屋、建築家、小売商があげられる。少数の者が書記と教員、それから弁護士、メソディストの牧師、医師がそれぞれ1名いた。

メンバーの約  $\frac{1}{4}$  の所属する宗派について知られていない。当時、ひとびとは教会所属のメンバーにならなくとも、しばしば、その教会に参集した。残りのメンバーの宗派はほぼ判明している。 $\frac{1}{3}$  が会衆派、 $\frac{1}{5}$  がメソディスト派、11名がバプティスト、5名が長老派であった。そのほか、ニュー・ヘブンの自由教会、クエーカー、ユニテリアン派などに所属していた。

当時、正統とはいえない宗派の信者はひたすら真実を求めて、1つの宗派からほかの宗教グループにというように流転の歴史をもつことが指摘されている。オニーダの大部分の完全主義者がこのような事例であったという資料は見出されない。ただ、5名のメンバーだけが1840年代前半の千年王国論運動の波にまきこまれていたことが記載されており、多くのメンバーは宗教についてかなり変わった思想をもっていたという報告もあるが、これは新しく多様な宗教運動がこの国を吹きまわっていた当時ではとりたてて異常な事態とはいえない。

オニーダ人に関する別の資料のなかで、1853年にこのコミュニンについて或るメンバーが「オニーダの共同体に参画した主流のひとびとは謹直で、資産もある男女で、善良な性格と社会的地位をもっている」と指摘する。ブットニーのもっとも初期の時代から、オニーダの崩壊による引退まで、ノイエスは常に「コミュニンの創設に当って、健全な労働は人材の注意深い選択なしには得られない」と主張している。

ブットニーからオニーダへのコミュニン運動を通して、ノイエスは生活のための新しく、しかも永続する社会組織化にあたって、そこには共通の価値とコミットメントの感情が内在化されねばならないとした。彼は「復活論者は社会の再生を望んで失敗し、社会主義者は魂の再生を願って挫折したと断定し、当時の2つの代表的な思潮傾向の超克をめざした。そこでオニーダでは、拡大家族の社会的モデルの創設によってのみ、宗教的・社会的生活のすべてはこの凝集する全体単位に向って再組織化されると期待した。

ノイエスは数年にわたって、伝道によりめぐりあったもっとも忠実な信徒たちをオニーダに呼びよせた。1843年の終りには85人の成人と子どもたちがこの共同体に所属し、次の数年間に200人以上のメンバーが加わり、ジョン・ハンフリー・ノイエスの燃えるような「バイブル・コミュニズム」の信念、卓越した説得力によって論じた「完全」の実現、つまり「この世を天国に」をひたす



ら追求することになった。

## 参 考 文 献

- Carden, Maren Lockwood, Oneida : Utopion Community to Modern Corporation, The Jons Hoptins Press, 1969
- Fogarty, Robert S, *Dictionary of American Commune and Utopian History*, Greenwood Press, 1980
- Foster, Lawrence, *Religion and Sexuality*, Oxford University Press, 1981
- Hasting, James, *Encyclopedic Dictionary of Religion and Ethics*, Charles Scribnet's Sons, 1974
- Lockwood, Maren, *The Experimental Utopia in An America*, Beacon Press, 1966
- Kanter, Rosabeth, *Commitment and Community*, Harvard University Press, 1973
- , *Commitment and Social Organization*, *American Sociological Review*, 33 (1968)
- Kephart, William M, *Experimental Family Organization*, *Journal of Marriage and Family Living*, 25, 1963
- Moment, Gairdner (ed), *Utopias : The American Press*, 1980
- Parker Robert A, *A Yankee Saint*, G.P. Putnam's Sons, 1935
- Robertson, Constance Noyes (ed), *Oneida Community : An Autobiography, 1851-1876*, Syracuse University Press , 1970
- , *Oneida Community Profiles*, Syracuse University Press, 1977
- Thomas, Robert David, *The Man Who Would Be Perfect*, University of Pencylvania Press, 1977
- Wallingford, Conn, *Handbook of the Oneida Community*, Office of the Cirenlar, 1867
- Zablocki, Benzamin, *Alienation and Charisma*, The Free Press, 1980

## The Road to Oneida

Shin-ichi Suzuki

What accounts for the development and relative success of such a remarkable “free love” community practicing “Bible Communism” in the Jacksonian Era and after? How did such a system originate, attract capable members, and restructure their religious, social, and economic lives so that the resulting community could prosper over more than a quarter of a century? And what implicit or explicit critique of the marital, familial, and sexual patterns of the larger society did the Oneida Perfectionists make? These will be the primary questions addressed in this paper. Although a thorough sociological analysis of how the Oneida Community functioned once it had become established would be of much interest, the primary focus here will be on the historical development of the distinctive beliefs and practices pioneered at Oneida. The historical development of Oneida was closely related to the larger stresses and strains of antebellum society. This paper will suggest how the larger social critique underlying Noyes’ thinking was related to the embodiment of his ideas in functioning communal life.